



# ピッポ新聞

2006

9

No.213

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

## 後立山連峰の 未踏域を行く

快速の夜行は、荻窪近辺の人身事故のため時刻を1時間以上遅れて午前1時を過ぎてから新宿を発したが、信濃大町駅にはほぼ時刻表通りの5時ちよつと過ぎに到着した。駅前にはタクシーが何台か止まり、到着した夜行から下りてきた登山客に相乗りを呼びかける声が飛び交っていた。

扇沢行きは1番のバスは5時半頃だったので、確認のためバス停に直行する。ところが、先客によるともう今シーズンはこのバスは運行されておらず、1番のバスは6時半だというのだ。仕方なくタクシーの呼び込みのところまで戻った。聞いてみると扇沢まで一人1500円だという。バスが1300円くらいだから余り値段に差がないのでタクシーで行くことにした。相客は50代半くらいのご夫婦と、後一人は30代の男性だ。ご夫婦はぼくと同じコースを登るようで、爺ヶ岳から鹿島槍そしてキレットを通過して、五竜岳へ向かうという。もう一人は剣岳を目指すという。

ご夫婦は柏原新道の登山口でタクシーを降りた。ぼくはと言うと、もう一人の相客と扇沢までタクシーで行き、そこで身体を軽くにすることにしたので。だって山では、たとえ100グラムでも軽い方がらくなものね。

今回は山小屋泊まりだから、ザックも釣りなどの時に使うアタックザックにし、重量も8キロ以下に抑えたのである。それにね、真夏の暑い盛りに週2回、1時間以上のジョギングをして、体重だつて59キロから60キロの間を維持してきたのだ。努力することが嫌いだけど、それなりに準備はしてきたのである。

すつきりしたところで、登山口まで戻った。6時7分。家に電話する。日曜日のためかカミさんはまだ寝ているようだったが、それでも数回の呼び出し音で受話器をとった。今から登ることを伝え、もう下山まで連絡できないことも伝えた。こちらは気分が高揚しているが、カミさんは残りご機嫌がよろしくなかった。

早朝のためか、空は曇っていて回りの山の頂が見えない。

さて、出発だ！

樹林の中をつづら折れの登山道をなるべく汗をかかないようにこころがけながら、ゆつくりとしたペースで行く。

この登山道はときどき左側に谷が出てくる。沢の瀬音も下のほうから聞こえる。扇沢か？1時間ほど登るとケルンの積んであるところに出た。ここで一息いれる。(これを山の用語では一本立てるといふ)谷の上流部を見上げると、稜線上に種池山荘が望みできる。でも、あそこまではまだ2時間はかかるだろうか。

坂道を歩くことに体が慣れてきたようである。先に行く何組かのパーティーを追い越した。タ

クシーでいっしょだったご夫婦にも追いつき、言葉を変えて追い越した。

コバイケソウが群落してところまで登ると山荘はもう間近だ。でも1ヶ月前後の背丈のコバイケソウは、花は既に散って葉と茎だけだった。葉と茎は今はまだ緑だが、まもなく茶色に枯れるのだろう。山の季節は駆け足で秋に近づいているようで、それを体で感じる。

8時47分種池山荘に到着。ここまでで500ミリリットルの水を飲んでしまったので、空のペットボトルに水を買った。80円だった。この水は雨水を貯めたものだろうか？他に一本350円のジューズを買って飲む。

一息入れたところで9時7分、爺ヶ岳に向かって出発だ。登山道は両側をハイマツに覆われた中に行く。所々でハイマツに遠慮がちに咲いているイワカガミのちいさなピンク色の花が、目を楽しませてくれる。

ハイマツは生息している場所によって、高度や自然条件のちがいによるものだろうか、木の高さが随分違うようである。

高さ十数mで地面にしがみつくように這っているのがあるかと思えば、はるかにほくの身長より高くジャングルのように密集しているハイマツもある。ここは平均的なようでも1ヶ月前後である。(これ勝手にぼくが思ったこと)

種池山荘まで登ってくる途中で、唯一ぼくを追い越していった女性が下ってきたのに出会う。彼女はどうかやら登山でなく山岳マラソン(?)の訓練のようで、腕時計を

見ながら走り下っていった。

爺ヶ岳南峰に着く、しかし、曇ってまわりの景色は見えない。写真を一枚撮り、すぐ出発。

登山道は頂上と通らず、トラバースしているが、中峰の頂上にも寄っていくことにした。

到着は10時ちょうどだった。ここでも写真を一枚。

登山道に戻り、南・中ときたから、北があるはずだがと注意していたが、それらしき道が見つからない。以前来たときも北峰の頂上を確認出来なかったが、今回も確認できず通り過ぎてしまったようである。

11時5分冷池山荘に到着。快調なペースでここまで登ってきた。ここに一泊して、明日朝、ここから先に進む予定であった。しかし、まだキレット小屋まで行ける時間の余裕は充分ある。

## どうしてよじろ?

これから鹿島槍を越えてキレット小山まで案内地図にはコースタイムで4時間とある。山小屋の人に様子を聞いてみる。すると、「鹿島槍の南峰から先は道の状態が、がらつと変わるし、天気も雨が降ってくるかもしれないから、余程体力に自信があれば別ですが、先へ行くのは明日にしたらどうですか」という。そういうられると、予定通りきているのだし、別に無理をすることもないか。予定通りここに泊まる。宿泊手続きをすませて、案内された部屋

に行く、この部屋にはまだ先客が誰も居ず、一番奥の特等席(?)を指示された。

繁忙期を過ぎたからだろうか、見ればスベースは畳一畳分は十分にあり、隣の間も少し空間がある。これはいいぞ!

山小屋の常で、既に布団が敷かれている。ごろつと横になると、眠り込んでしまった。目覚めると午後2時を過ぎていた。やはり昨夜の夜行では余りねむれず、さらにここまで4時間あまり山をのぼってきた疲れが出たようである。

どうかやら先に進まなかったのは正解だった。寝ているあいだに登山客が到着したようで、誰もいなかった部屋には相客が何人が居た。

談話室に行った。そこでコーヒートとケーキセツトというのを頼んだ。近頃の山小屋はかなりおしゃやれである。まあ、値段が地上より少し高いという難はあるが、輸送料(ヘリこぶターで運ぶ)を考えたらしかたがないことか。

ここではもう何人がビールやウイスキーをやりながら、談笑していた。ぼくもその仲間に入れて貰う。

同じ位の年齢の単独行者一人と談笑する。一人はぼくと同じ年で今年定年になって、今は毎日が日曜日で毎週山に登っていると言うことだった。

同じ年齢でも、こちらは定年なしの零細な子どもの本屋の親父である。何時になったら毎日が日曜日になり、自由に山登りや野遊びが出来るようになることやら?!もしそんなことが可能になる時がきたと

しても、こちらの体力がすでに無くなって  
いるかもしれない。

念願のマッターホルン登頂は本当に夢の  
また夢で終わってしまったのだろうか！(ちょっ  
と、暗い気持ち)

もう一人は年齢がぼくより3歳ほど上の  
ようので、話に相づちを打つ程度で、もっぱ  
ら持参のウイスキーを楽しんでいる。

山小屋の談笑の常で、自分の登山の体験  
を語り合うことが多い。毎日が日曜日氏  
「ぼくは縦走せず、もっぱら単発で一度の  
登山で一つの山にのぼるだけだ」という。

今回も鹿島槍に登って下山するという。  
登山のスタイルはそれぞれであっていい、  
毎日が日曜日氏のように時間がじゅうぶあ  
ればそういう登り方だって楽しいし、安全  
かも知れない。

夕食は午後5時からといわれていたが、時  
間通りに夕食の案内が有り、食堂に行く。  
今日はツアー登山の団体もあり、食事は2  
回にわけられるようだ。意外に宿泊客が多  
い。

## いよいよ未踏域へ

翌朝は5時から朝食ということだったが、  
ぼくは一番速く食堂に行き、時間より10分  
も早く食事が出来た。

外で食事をするときなど、常々カミさん  
から食べるのが早すぎて行儀が悪いと、ぼ  
くはお叱りを受けているし、自覚もしてい  
るのだが、なんとそのぼくより後からやつ  
てきて前の席に座った御仁は、ぼくより速

く食べて席を離れた。これをカミさんに見  
せてやりたかったな。(何といたろうか?)

今朝はみんな出発を急いでいるようだ。  
それというのも、昨日の天気予報では午後  
から山は雨になるということだったからで  
ある。

同じ部屋の若者もそうだったが、山小屋  
で弁当を用意して貰って暗いうちから出発  
した人も結構いるようだ。ぼくも冷池山荘  
を5時5分に出発した。すでに、明るさは  
十分でヘッドランプはいらない。

10分ほど登ってテン場を通過する。昨日夕  
方、鹿島槍を見たくてここまで散歩にのぼっ  
たのだが、ガスっていて見る事が出来な  
かったが、今朝も鹿島槍は雲の中だった。

テン場をとおらずぎるとすぐ高山植物が  
多い草付きの場所に出た。今回の登山では  
山の花を可能な限り楽しもうと考えていた。  
その姿を昨日からデジカメに撮っていた。  
ハクサンフウロウが目についたので、デジ  
カメにおさめようとしたらシャッターが切  
れない、よく見ると、メモリーが一杯であ  
ると、表示が出ている。

前に撮った不要な写真を一こまずつ消し  
ていけばよい(これまでもそうしていた)  
ので、消去という文字がでたので、ボタン  
を押したらここ何年か分の山の写真から、  
昨日までの写真がすべて消えてしまった。  
あーあ！一瞬にした消えてしまったデータ。

だからデジタルは嫌いだ！  
何種類かの花の写真を時々立ち止まって  
撮っていたら、遠雷の音が聞こえた。まず

いな。

以前経験した事だが、遠雷だからと安心  
していたら、いきなり近くで「ゴロゴロ」  
鳴り出して怖い思いをしたことがあった。  
とにかく先を急ぐことにした。

鹿島槍の登に入ってからまもなく同室だった  
若者が下山してきた。彼は今朝3時頃には  
ごそごそ準備していたっけ。

本来ならこの辺りは、とても気持ちの良  
い稜線歩きのはずだが、雨との競争で先を  
急がなければならぬのは残念だ。

6時40分鹿島槍南峰着。

頂上では何組みかのパーティーがくつろ  
いでいた。やはり、頂上からの景色を楽し  
むことができない。先程ポツリポツリとし  
た雨が、今にも本格化しそうな雲ゆきだ。  
先を急ごう！

## ライチョウの親子

いよいよここから先は、ぼくにはまだ未  
知の領域だ。今回の登山は、ここから五竜  
岳までを歩くのが目的の一つだ。

北峰への登山道は、昨日山小屋の人がいつ  
ていたように急な岩場の下りから始まった。  
途中の岩場にはチシマギキョウやトウヤク  
クリンドウが所々に咲いている。トウヤク  
クリンドウは今が盛りのようである。とちゅ  
うで、岩の間にへばる着くように一塊りの  
ピンクの花が鮮やかなピンク色で思わず  
写真に納めたが、その花が何であるかは同  
定する事が出来ない。イブキジャコウソの  
様でもあるけど、花が少し大きいようでも

あつた。なんだろう？

鞍部までおりきつたところで、道は少しならかな登りになった。ここで昨日タクシーで一緒だったご夫婦に追いついた。

立ち止まって登山道を指さす先を見たらライチョウの親子が歩いていていた。

母鳥に従っているのは母鳥より少しだけ小さい子どもだ。しかし、子どもは一羽しかない。

まだ子どもがウズラぐらいの大きさの時は、複数の子どもが親鳥に従っているのを何度か見たことがあるが、親鳥にちかい大きさの子どもを見たのはこれが初めてだ。複数いた子どもが成長過程で死んでしまったのだろうか？

ご夫婦は昨日も爺ヶ岳の近くでもライチョウに出会ったと言っていたが、やはり子どもは一羽だったという。昨日出会ったライチョウと同じ鳥がここまでいどうしてきたのだろうか？

そういえば昨日、毎日が日曜日氏も、爺ヶ岳の頂上付近でサルに出会ったと言っていた。こんなに標高の高いところまで二ホンザルが侵出してくることは少しおかしいのではないかというのである。高山でも生態系が狂いだしているようだ。

親子のライチョウは高山植物をついばんでいた。高山植物の減少は雷鳥の生息をも危うくしているのだろう。

自然の厳しさを伺い見た気がした。

間もなく、道は北峰に登る道とキレットへ向かう道の分岐に出た。ご夫婦はそのままキレットへ進いたので、ここで別れて、ぼくは鹿島槍北峰を目指した。15分ほど登ると、頂上に着いた。頂上には誰もいなかったが、景色も見えなかった。

すぐ縦走路に戻り、ご夫婦のあとを追う。間もなく追いついた。今度は道を譲って貰い、先にでる。

いよいよキレットの核心部だ。クサリやハシゴが連続して出てきたが、足場もすっかりしているし、不安など感じることもなく通過する。実はぼくはさんざん溪流釣りで沢登りをやってきたので、こういうクサリやハシゴの出でくる場所は比較的苦にはならないし、他に人がいなければ速いのだ。

8時6分キレット小屋到着。休んでいるとご夫婦も到着した。

8時30分キレット小屋を出発。ここからはしばらくの間、岩場のアップダウン道が続いた。おりからの雨で岩が滑りやすく、キレットとより、こちらの通過に緊張させられる。

雨で岩が滑りやすくなっていたので、気を付けていたのだが、滑って手を付いたときに岩で手首から手のひらにかけて薄く10センチほど切ってしまった。幸い血がにじむ程度なので、バンドエイドを貼って出発。

北尾根の頭と言つ表示を過ぎて、下りにかかると、遠く霞んで五竜岳が望みできる。

後残すは五竜岳への最後の登りだ。

天気の良いで遠くに見えていた五竜岳だったが、登りだしたら（結構、青息吐息だったが）五竜の頂上は意外と近く11時9分到着。

## これで未踏域を無事通過！

さて、下山だ。

五竜岳にはまだ積雪がある、5月連休に登っているが、そのときは雪の斜面を直登したので、この登山道を歩くのは初めてだ。11時50分五竜山荘に到着。うどんを注文し、まずは腹を満たした。

予定ではここに一泊して明日遠見尾根を下山だが、冷池山荘を1時間早く出たこともあり。随分早くここまで来てしまった。

山荘の人に聞いたら、「人にもよりますが、ロープウェイの駅まで4時間くらいではないか」という。「最終のロープウェイが午後4時頃というので、今から下山すれば間に合うでしょう」といつ。

今回は体力を試す意味もあり、一気に下山することを決意した。ひたすら先を急いで、2時間強でロープウェイの駅まで下山した。今回の山行は無事終了である。カミさんに電話で下山を知らせる。さー温泉だ！

今回は山行記で終わってしまいました。次回  
は子どもの本の情報満載です！（本当かな？）